

コープふくしま 「せいきょう便」が避難者の買い物を支援

コープふくしまは、福島市の方木田（ほうきだ）店を拠点とした「せいきょう便」の運行をスタートしました。これは生鮮品や食料品を積んで毎週決まったコースを巡回し、店舗と同じ価格で商品を供給する移動店舗です。冷蔵ケースを備え付けた2トントラックで、肉や魚、野菜、果物、惣菜といった日配品や調味料などのドライ品を販売しています。

車両はならコープ（奈良）から東日本大震災の復興支援として寄贈されたもので、移動店舗の運営ノウハウは生協共立社（山形）とみやぎ生協（宮城）から提供されています。

11月30日に出発式が行なわれましたが、テスト販売として11月16日から運行しています。12月8日現在、月曜日から金曜日まで1日6カ所、合計30カ所を巡っています。朝から積み込みをはじめて、午前中3カ所、いったん昼過ぎに帰店して補充したのち、午後3カ所を回るというスケジュールです。

巡回しているのは、東京電力・福島第一原子力発電所の事故に伴い、避難生活を強いられている浪江町、双葉町、飯館村の方々が生かす仮設住宅が中心です。

例えば、飯館村から避難している方々が住む福島市松川町の「松川工業団地」内の仮設住宅では、徒歩で行ける距離にコンビニエンス・ストア1軒しかありません。高齢者が多いうえ、一人暮らしの方も多いため、買い物にはとても不自由しています。



仮設住宅を訪れた「せいきょう便」。

「せいきょう便」のご利用者に話を聞くと「買い物に行かなくて済むのでとても便利です」とおっしゃっていました。生鮮品が手に入ることも役立っているようで「今日はサンマの塩焼きにするわ。（調理するときには）煙がモクモク出ちゃうけど」と笑いながら、生のサンマを購入していく一人暮らしのおばあさんもいました。

コープふくしまでは、避難生活を強いられている方々への援助として、購入代金から5%を差し引く「避難生活者割引」を2012年3月20日まで実施しています。そういったきめ細かな配慮も利用者には嬉しいようです。「生協のトラックが来るときは、毎回買っていますよ。私は脚が悪いので、遠出できないからね。助かっています」と杖をついたおばあさんがにこやかに話してくれました。

利用者に喜ばれている一方、「せいきょう便」の存在をまだ知らない人がいることも事実です。小学校跡に建てられた仮設住宅では「初めて利用しました。いつもこの時間に来ているの？覚えておくよ」という男性もいました。

しかし「せいきょう便」を担当しているコープふくしま 店舗部 タスクの大宮満夫さん

は「はじまったばかりなので、まだまだこれからですよ。もっと停車ポイントを増やしていきたいし、できるだけ多くの人役に立ちたいので、コースの組み換えも並行しながら考えていきます」と力強く語っています。チラシを配布したり、ポスターを掲示版に貼るなどして「せいきょう便」の認知度を高めていこうとしているそうです。

「せいきょう便」は福島市内すべての仮設住宅を網羅し、二本松市にある仮設住宅も一部訪問しています。今後の運行エリアについて、コープふくしま 店舗部 タスクリーダーの藤田良二さんは「近隣の伊達市や桑折町(こおりまち)、国見町などにも仮設住宅がありますので、1 つずつコースをつくっていきたいですね。ただし、やや距離があるので、例えば昼にいったん店舗に戻らずそのまま終日運行するというのも考えています」と話してくれました。

仮設住宅を巡る一方、「せいきょう便」はスーパーマーケットや商店が撤退した住宅地や、高齢化が著しい団地なども訪れています。その理由について、藤田さんは「福島市内も高齢化が進んでいます。東日本大震災以降は放射線による健康被害を心配して小さな子どものいるご家族が県外に引っ越していますので、さらにお年寄りだけが取り残されるという現実もあります。買い物に困る人に対して、生協としてどう対処していくか。『せいきょう便』はそのための試金石だと思います」と説明してくれました。

藤田さんは「もちろん売り上げは大事です」と前置きしつつ、「せいきょう便」が週に一度、決まった曜日と時間に訪れることで生まれる「人と人のコミュニケーション」が大切だと強く感じているそうです。

『どうしてた?』『あら、久しぶり!』といった会話が生まれています。なかには『あそこのおばあちゃん、耳が遠いのよね』と言ってわざわざ『せいきょう便、来たよー』と呼びに行く人もいます。仮設住宅は個々が孤立しがちだと聞きますが、『せいきょう便』が来るときに会える人がいる——。コミュニケーションの場をつくることは、生協ができる復興支援の1つのかたちなのかもしれません(藤田さん)。



アイスクリームを見つめて
どれにしようか悩む女の子。